

第三章 ユダヤ国家の内なる敵

△我々は内なる敵によつて滅びるかもしれない▽

最近『シャイ・ロック』は本気でそう考え始めていた。

建国闘争でパレスチナ人を蹴散らし、独立のための第一次中東戦争を含め四度にわたる中東戦争で周辺のアラブ諸国を完膚無きまでに打ちのめしたイスラエル。今もガザ地区のハマスをそしてイランとの間で国家の生存のための闘いを繰り返している。イスラエルを地中海に追い込んで世界地図から抹殺すると言ってはばからないこれらの勢力に対してイスラエルは容赦しない。

これまでの闘いを率いてきた歴戦の勇士『シャイ・ロック』が恐れる内なる敵——それはイスラエル国内に抱えるユダヤ人とパレスチナ系アラブ人の人口の問題であった。一九六七年の第三次中東戦争はイスラエルの奇襲作戦が成功し、わずか六日間で終わった。その時、同国は当時ヨルダンが支配していたヨルダン川西岸とエジプト固有の領土シナイ半島を獲得した。いつの時代でも戦争で領土が広がることは勝利を意味する。しかし新たな領土とは言え、ヨルダン川西岸及びガザ回廊を含むシナイ半島には既に何代にもわたりアラブ人たちが住んでいた。パレスチナ人と呼ばれた彼らの中には既に戦火を避け難民となつて隣国のヨルダンやレバノンに逃れた。さらにその一部は石油ブームに沸くクウェイト、サウジアラビアなどの湾岸諸国に移り住んだ。しかし、一方で土地を離れず息をひそめて戦火が頭上を通り過ぎるのを待ち続けた者も少なくなかった。イスラエルは戦後の占領政策のもとで多数のパレスチナ系アラブ人

を抱え込むことになった。こうして国内におけるユダヤ人とアラブ人の比率という天秤がアラブ人側に少し傾いた。

天秤の針を元に戻そうとイスラエルは世界中のユダヤ人たちに、イスラエルに来て、と呼ば掛けた。イスラエル政府は祖先に少しでもユダヤ人の血が混じっていると認められる者たちを世界中から探し出し彼らに誘いの手を伸ばした。欧米先進国のユダヤ人達が現在の豊かな生活を犠牲にしてまでイスラエルに舞い戻ることはなかった。米国生まれの若くて敬虔なユダヤ教徒が宗教的高揚感に駆られて共同農場キブツに駆け付ける姿があったが、その数はわずかなものであり、ユダヤ人とアラブ人の人口のバランスに影響を与えることはなかった。

そこでイスラエルの為政者は世界各地で今も貧困と差別に喘ぐユダヤ人たちを「祖国に呼び戻す」作戦を開始した。時には伝説上でユダヤ人の末裔とされる者をも対象とした。それが世に言う「ソロモン大作戦」である。

旧約聖書に名高いソロモン大王とシェバの女王の物語。紀元前九八〇年、当時シエバと呼ばれていた現在のエチオピアを支配していた女王マケダははるばる三千キロ離れた古代イスラエル国王ソロモンのもとに朝貢した。マケダの美貌に魅かれたソロモンは策を弄して女王を籠絡し交情を結んだ。帰国した女王は一人の男の子を生んだ。その後シェバはエチオピア帝国と名前を変え帝国は二十世紀末までアフリカの一角で生き永らえた。女王マケダの子孫はユダヤ人の末裔「失われた十二支族」の一つと

して歴史の中でひっそりと暮らし続けたのである。

一九七四年にエチオピア革命が発生、最後の皇帝ハイレ・セラシエ一世が退位させられ軍事政権が権力を掌握した。しかし国情は安定せず一九九〇年には地方軍閥が跋扈してエチオピアは四分五裂の状況となった。国民は貧困に喘ぎ、中でもユダヤの末裔たちは極貧状態に追い込まれた。

イスラエル政府にとってエチオピアのユダヤ人を救出することは神の意思であった。一九九一年五月、エチオピアの混乱に乗じイスラエルはジャンボジェット機をアジスアベバ空港に強行着陸させ、同朋をイスラエルに運んだ。作戦時間はわずか三十六時間。その間に救出した人数一万四千人。多数のジャンボジェット機を徴用し、イスラエルとエチオピアをピストン輸送する空前の大作戦であった。こうして今やイスラエルのアフリカ系ユダヤ人は六万人に増えたのである。

アフリカ系ユダヤ人移住者が欧米からのそれに比べ桁違いに多いとは言え、ヨルダン川西岸とガザ地区の併合で抱え込んだアラブ人に比べれば物の数ではない。さらに大胆なユダヤ人の呼び込みを図らなければならない。そこで目を付けたのがウクライナ地方に住むユダヤ系農民たちであった。ディアスポラによる放浪の末に彼らがウクライナに住みついたのは千年以上昔のことである。その後幾世紀にもわたり彼らはロシア人と結婚を重ね、ヘブライ語は忘れ生活習慣も宗教儀礼も殆どロシア人になり切っていた。それでもイスラエル政府は三代前、つまり祖父母のいずれかがユダヤの血を引いているのであればイスラエルへの移住を認めた。祖父母自身も自分たちが生粋

のユダヤ人であるかどうか証明のしようがなかったのだが、そんなことは問題にならなかった。生粋のユダヤ人であると自己申告すれば、彼らとその子供も孫もユダヤ人と認定された。平等な社会主義を標榜するソビエト体制ではあったが、農民たちはその言葉とは裏腹に冷遇され、中でもユダヤ系と見なされた者たちはさらに低く見られていた。そのような彼らにとって近代国家イスラエルに移住できるのはまたとないチャンスだったのである。

アフガン戦争でソ連を崩壊に追いやった米国は、イスラエルによるロシアからのユダヤ系（と称する）農民の移住政策を強力に後押しした。実はこれらウクライナ農民の中には一足飛びに米国に移住を希望する者が多かった。しかし米国は農業知識しか持たない移民を受け入れる気は毛頭なかった。米国はメキシコからの不法移民に手を焼いており、医療や産業に関する高等技術を持った移民以外は受け入れたくなかったのである。溢れる水の導水路は米国ではなくイスラエルに向けられた。こうして百万人を超えるロシア国籍者が入国してきた。

イスラエル政府はあの手この手で世界中からユダヤ人と呼ばれる人々を移住者としてかきあつめた。しかしそれでも『シャイ・ロツク』の憂慮が消えることは無かった。それは毎年の政府の人口統計にはつきりと表れていた。パレスチナ系アラブ人の人口増加率がユダヤ人のそれを大幅に上回っていることである。ユダヤ人の中でもアシケナジムとエチオピア系やロシア系などアシケナジム以外の増加率にも顕著な差があり、いずれアシケナジムがユダヤ人の中の少数派に転落する恐れも指摘されたが、差し迫った問題はともかくアラブ人とユダヤ人の比率が年々縮まっているこ

とであった。今世紀半ばにはその比率が逆転すると人口統計学者は警鐘を鳴らした。何故アラブ人の増加率がそんなに高いのか？アラブ人が子供を多く生む多産民族であることは統計が示している。避妊の知識が乏しいアラブ人の男によって女性たちは次々と妊娠を強いられ「貧乏人の子沢山」となった。貧乏で満足な栄養もとれず衛生状態もひどかった一昔前であれば子供たちの多くは大人になる前に死んだ。しかし近代国家のイスラエルは同時に人道国家でなければならぬ。貧乏なアラブ人家族に對して十分とは言えないまでも食糧と医療の手が差し伸べられ、子供たちは無事成人に達する。貧乏でも子供たちは死ななくなった、のである。それがアラブ人の人口を増加させ、ユダヤ国家としての将来に問題を孕んでいた。

このことだけはユダヤ純血主義者の『シャイ・ロック』としても如何ともしがたいことであった。武器を持つて刃向かってくる敵であれば性能の更に高い武器で相手を葬ることができ、それは戦争行為或いはテロ対策行為として許される。特に米国が後ろ盾になってくれるため国連でも自国イスラエルの行為が公然と非難されることは無い。しかしイスラエル政府と言えども自国に住むアラブ人の生殖行為を制限することはできない。しかも生まれた子供たちには食料と医療を与え無事成人する手助けをしなければならぬ。

第3章
第2部
第1部
第0部

イスラエル人口問題研究所は、現状のまま推移すれば二〇五〇年に国内のアラブ人の数がユダヤ人を超える、とする推計値を発表した。「現状のまま推移すれば」という前置きの言葉には、「政府が何ら対策を講じなければ」と言う意味が込められてい

た。政府が和平後のパレスチナ難民の帰還に強硬に反対しているのもそのためであった。パレスチナ和平の条件の一つとして難民が元の居住地に戻ることに国際世論は同情的であったが、そのようなことを認めれば、いずれ民主国家として選挙を行った場合ユダヤ人に不利に働くことが明らかだ。

政府にとってその他にどのような対策が考えられるのか？明確に答えられる者はいない。否、「ある対策」を思いついたとしても、それは口に出して言えるようなことではないことは確かである。